

原始仏教における kāma の考察

安 藤 淑 子

〔抄 録〕

古代バラモン思想において kāma は「欲する」という心の働きを意味し、これが人間の行為の根本的動因と見なされていた。一方、原始仏教における kāma はこれとは異なる語義・用法を有していた。

すなわち、原始仏教では最古層の経典よりすでに kāma は単なる心の働きではなく、認識と感受によって変貌した外的事物それ自体をも意味していた。言うなれば、「対象」と「心の働き」が一体となった具体的な諸現象を、kāma という語によって指し示していたのである。このような語義の特徴を反映して、原始仏教経典における kāma はほとんどの場合複数形で用いられている。

キーワード 原始仏教、kāma、心の働き、対象、複数形

1 はじめに

kāma (Sk. kāma、√kam) は原始仏教経典中に頻繁に現れる用語の一つであるが、同時に古代インドにおいては仏教興起以前から広く知られた概念であった。

本稿では、原始仏教における kāma について考察を行うが⁽¹⁾、その際、仏教興起以前の古代バラモン思想に見られる kāma の様相を概観し、続いてこれにもっとも近接すると思われる原始仏教最古層の経典に現れた kāma の語義・用法を分析する。この過程で仏教興起以前の思想に見られる kāma と、原始仏教における kāma の間に見出される共通点・相違点を明らかにし、これによって原始仏教の最初期における kāma とはどのようなものであったのかを考察する。また、ここで見出された kāma の特徴が、最古層以降の経典においても同様に見出すことができるか否かという点に関して検証を行い、これによって原始仏教における kāma の全体像を捉えることを目的とする。

古代バラモン思想の資料としては、最古の『リグ・ヴェーダ』(Rig-Veda、以下RV)以降、仏教興起以前に形成されたと考えられる『ブリハッド・アーラヤニカ・ウパニシャッド』(Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad、以下BU)と、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』(Chāndogya-Upaniṣad、以下CU)⁽²⁾の二編の古ウパニシャッド文献までを用いることとする。

また、原始仏教の最古層經典としては、多くの研究者によって極めて古い時代に形成されたと見なされる『Suttanipāṭa』（以下 Sn）の第 4 章 Aṭṭhakavagga（以下 Av）、及び第 5 章 Pārāyanavagga（以下 Pv）を用いることとする⁽³⁾。

なお、両経を最古層とする根拠について、前田 [1964]⁽⁴⁾ は様々な先行研究を以下のように集約している。

- ・言語の上で古代ヴェーダ語の語形が現れることが多い。
- ・Av、Pv は、しばしばその名によって他の聖典に引用せられている。
- ・部派の中には Av、Pv を独立の経として取り扱っているものがある。
- ・Av、Pv の vatta (or vaktra) metre はその構造上 jāṭaka、Thera-および Terīgāthā、Itivuttaka や Dhammapada に見られる metre よりも古い。
- ・Sn には Khuddakanikāya の中に含まれる古い註釈書 Niddesa（『義釈』、以下 Nd）があるが、これは Sn 全体ではなく Av、Pv および、第 1 章第 3 経に対してのみ註釈している。

本稿における原始仏教經典の引用は、すべて PTS 版の Pāli 原典に拠る。また、本文中の kāma の表記は特に単・複を示す場合を除いてすべて kāma とする。

2 仏教興起前の古代バラモン思想における kāma

RV の第10巻（「ナーサッド・アーシーティア讃歌」）にある世界創造の神話には、次のように記されている。

最初に意欲はかの唯一物に現れり。こは意（思考力）の第一の種子なりき（kāmaṣṭadaghre samavartatādhi manaso retaḥ Prathamam yadāsit）。詩人ら（靈感ある聖仙たち）は熟慮して心に求め、有の親縁（起源）を無に発見せり。（RVx, 129.4）⁽⁵⁾

ここで言う「意欲」とは、kāma（＝欲すること）を指している。唯一物に生じた kāma によって、世界創造が発動するのだが、このような創造神話はブラーフマナ文献（「この男子すなわちブラジャー・パティは欲した：『われ願わくは増殖せんことを、繁殖せんことを』と。（Śatapata-Brāhmaṇavi, 1.1.8）⁽⁶⁾」）、或いはウパニシャッドの文献（「『それは観察した一わたしは多く存在したい、わたしは繁殖したい』と。それは熱を流出した。（CUvi, 2.3）⁽⁷⁾」にも類似した形式を見ることができる。

「欲する」と「行為」との密接な関係は、古ウパニシャッドの人間に関する記述の中で次のように言及されている。

（略）さて、よく知られているように、人々は言う―“この人間は欲望からだけ成る”と

(*atho khalvāhuḥ kāmamaya evāyṃ puruṣa iti*). 人は欲する通りに、そのような意図を有するようになる (*sa yathākāmo bhavati tatkraturbhavati*). 人は意図する通りに、そのような行為を行う。人は自己の行う行為に応じて、それになる。(BUiv, 4.5) ⁽⁸⁾

BUによれば、kāmaとは人間を形成するものであるという。kāmaは意図(kratu)を生み、意図は行為(karma)を生む。したがって、kāmaは人の行為の根本的な動因とでも言うべきものであるが、同時にBUiv, 4.5にあるように(「人は自己の行う行為に応じてそれになる」)、日々の行為が人を形作ると考えられていた⁽⁹⁾(「人は行為する通りになる。人は行動する通りになる。良いことを行う人は良くなる。悪いことを行う人は悪くなる(BUiv, 4.5)⁽¹⁰⁾」)。

「行為」の持つ重要性は、その動因となるkāmaの重要性にも直結している。次のCUでは、人は自らのkāmaを内省し、kāmaの正しいあり方(=真実のkāma)に気付くことの必要性が説かれている。

(略) なぜなら、彼のこれらの真実の欲望は、ここにおいて虚偽に覆われているからである(*atra hy asyaite satyāḥ kāmā anṛtāpidhānāḥ*)。場所を知らない人々が埋蔵されている黄金の財宝の上を幾度も歩きまわってもそれを見出さないように、これらのすべての生きものは、日々、そこへ行くけれども、このブラフマンの世界を見出さない。なぜなら、彼らは虚偽によって覆われているからである。(CUviii, 3.2) ⁽¹¹⁾

「悪を滅し、老いることなく、死ぬことなく、悲しむことなく、飢えることなく、渴くことなく、その欲望が真実であり(*satyakāmaḥ*)、その意図が真実である自己—それを人は探求すべきである。それを認識することを人は欲すべきである。この自己を見出し、そして認識する人、彼は、すべての世界およびすべての欲望を達成する(*sa sarvāṃś ca lokān āpnoti sarvāṃś ca kāmān*)」と、このようにブラジャーパティは言った。(CUviii, 7.1) ⁽¹²⁾

このように、古代バラモン思想においては人をブラフマンへと導く「真実のkāma」と、kāmaのあるべき姿を見失っている人の「虚偽に覆われたkāma」という二種類のkāmaが考えられていた。さらに最終目標であるブラフマンとの合一は、真実のkāmaの達成⁽¹³⁾であると同時にkāmaの完全な解消を意味していた。

(略) 欲望がなく、欲望を離れ、欲望が満たされ、自己(アートマン)を欲する人(*yo'kāmo niṣkāma āptakāma ātmakāmo*)—彼の生氣は外へ出て行かない。彼は、まさにブラフマンであるゆえ、彼はブラフマンの中に入っていく。(BUiv, 4.6) ⁽¹⁴⁾

(略) 彼の心臓に宿る、すべての欲望が解消される時に (yadā sarve pramucyante kāmā ye'sya hr̥di śrītaḥ)、死すべきものは不死になり、この世においてブラフマンに到達する。(BU iv, 4.7)⁽¹⁵⁾

バラモン的な宗教観・世界観を否定するところに成立した原始仏教が、ブラフマンと結び付いた「真実の kāma」なるものを受け入れなかったのは必然であろう。しかし「虚偽に覆われた kāma」云々に関しては、仏教もまたこれを人々の置かれた現状として認識していたと言ってもよいだろう。先に引用したCUviii, 3.2の「虚偽に覆われた kāma」には、その前段に人々が「父、母、兄弟、姉妹、友、香と花輪、食物と飲み物、歌と音楽、女の世界」を欲し、それらを得ることによって「幸せ」を感じること (CUviii, 2.1-2.10)⁽¹⁶⁾についての言及があるのだが、禁欲主義を背景に持つ仏教もまたこれら世間的な対象を否定的に捉えていたことは事実である。

しかし重要なことは、原始仏教が当初より kāma を「欲する」という心の働きとして用いなかった（したがって、kāma を行為の根本的な動因とは見なさなかった）という点にある。

そもそも心の働きとしての kāma (=欲する) それ自体は、善でも悪でもない。この場合問題となるのは、人が正しい対象を欲する (=kāma)⁽¹⁷⁾か否かである。たとえば『マヌ法典⁽¹⁸⁾』には次のようにある。

〔人間が〕欲望を本質としていることは褒められない。しかしこの世において欲望がない状態はありえない。(kāmātmātā na praśastā na ca-eva-īha-astyakāmātā) 実に、ヴェーダの学習も、ヴェーダに規定される行為の実践も欲望によって生じる。(Manu, 2.2)⁽¹⁹⁾ 欲望のない者の行為 (akāmasya kriyā) などこの世のどこを探しても知られない。何をしようともそれはすべて欲望のなせることである。(Manu, 2.4)⁽²⁰⁾

また、次の『マハーバーラタ⁽²¹⁾』にはさらに具体的に述べられている。

カーマに駆られればこそ、聖仙達も、木の葉、木の実、木の根を食し、また霞を食って、五官を制し、ひたすら苦行に専念するのである。(Mhb, 12.161.29)⁽²²⁾

商人、百姓、牧者、職人、工匠、さらに神事を執り行う者達も、すべてカーマに駆られてそれぞれの生業にいそむ。(Mhb, 12.161.31)⁽²³⁾

カーマを本質としていないものは、過去にもなかったし、現在にもないし、またあり得べくもない。大王よ、それは(生類の)精髓である。ダルマとアルタの二はそれ(カーマ)に依拠している。(Mhb, 12.161.33)⁽²⁴⁾

一方、原始仏教經典において kāma が「欲する」という心の働きとして用いられるのは、

複合語における Bahuvrihi の用法 (～を欲するもの)、或いは kāma の副詞的用法 (kāmaṃ (欲するままに)) 等に限られる。以下に示す Bahuvrihi の用法では、他思想における kāma と同様「欲する」対象は善でも不善でもあり得ることがわかる。

tasmā ime bhonto samaṇa-brāhmaṇa sīlavanto kalyāṇa-dhammā jivitu-kāmā amaritu-kāmā sukha-kāmā dukkha-paṭikkulā. (DNii, 23) ⁽²⁵⁾

それゆえ、これらの戒をそなえ、善なる法をそなえた沙門・バラモンの尊者達は、生を欲し、死を欲せず、楽を欲し、苦を厭うものである。

puna ca paraṃ āvuso bhikkhu dhammā-kāmo hoti piya-samudāhāro abhidhamme abhivinaye uḷāra-pāmuḷlo. (DNiii, 33) ⁽²⁶⁾

そして次に、友らよ、比丘は法を欲するもの、愛すべき会話をを行うもの、勝れた法、勝れた律を大いに喜ぶものとなる。

このように、原始仏教では人々が執着する様々な対象があることは認めつつ、一方で「心の働き」としての kāma を仏敎教説中の kāma の語義としては採用しなかった。それでは、原始仏教における kāma とはどのようなものだったのだろうか。

3 原始仏敎經典に見られる kāma の特徴

3.1. 複数形の kāma

原始仏敎の最古層經典の一つである Av の第一經は「Kāma-sutta」(欲經)である。ここでは kāma について、次のように説かれている。

kāmaṃ kāmayamānassa tassa ce taṃ samijjhati, / addhā pītimano hoti laddhā macco yad icchati. (Sn, 766)

tassa ce kāmayānassa chandajātassa jantuno / te kāmā parihāyanti, sallavidhho varuppati. (Sn, 767)

Yo kāme parivajjeti sappasseva padā siro, / so imaṃ visattikaṃ loke sato samativattati. (Sn, 768) ⁽²⁷⁾

khettaṃ vatthūṃ hiraṇṇaṃ vā gavāssaṃ dāsaporisaṃ / thiyo bandhū puthu kāme yo naro anugijjhati, (Sn, 769)

abalā va naṃ baliyanti, maddante naṃ parissayā, / tato naṃ dukkhaṃ anveti nāvaṃ bhinnam ivodakaṃ. (Sn, 770)

tasmā jantu sadā sato kāmāni parivajjaye, / te pahāya tare oghaṃ nāvaṃ siñcitvā pārāgū ti. (Sn, 771)

kāma を求めつつある人が、もしそれ（を得ること）に成功するならば、人は欲しているものを得て心喜ぶものとなる。(766偈)

これら求めつつあるものへの欲求 (chanda) が生じたなら、kāma が失われると矢に射られたように苦しむ。(767偈)

足が蛇の頭を（踏まないように）kāma を避ける者は、心を傾注してこの世の執着を乗り越える。(768偈)

田畑、あるいは宅地、黄金、牛馬、奴僕、女達、親族達（といった）数多の kāma を人々が貪り求めると、(769偈)

無力がまさに彼に打ち勝ち、危難が彼を打ち砕くだろう。その時、苦しみが近づいてくる。壊れた舟に（漏れ入る）水のごとく。(770偈)

それゆえ、人は常にこのことを心に留めて kāma を回避すべし。それらを捨てて暴流を渡るべし。舟の水を汲みだして彼岸に到る（ものとなれ）と。(771偈)

一連の偈に見られる kāma（動詞形は除く）の語形は、次のように冒頭の766偈⁽²⁸⁾を除いてすべてが複数形になっている (pl.=plural, sg.=singular)。

- kāmam (sg.) kāmayaṃānassa (kāma を欲しつつある人が)：766偈
- kāmā (pl.) parihāyanti (kāma が失われる)：767偈
- kāme (pl.) parivajjeti (kāma を避ける)：768偈
- puthu kāme (pl.) yo naro anugijjhati (人々が多くの kāma を貪り求めると)：769偈
- kāmāni ⁽²⁹⁾ (pl.) parivajjaye (kāma を回避する)：771偈

実際に、「Kāma-sutta」を含む Av 全体に現れる15か所の kāma ⁽³⁰⁾ は、先の766偈を除いたすべてが複数形である。また、同じ最古層經典である Pv では、9か所に現れる kāma のすべてが複数形である。さらに Sn の他章においても、合計23か所（内、散文部分1）の kāma のすべてが複数形であった。

このような偏りは、次表に示す主要4ニカーヤ中の kāma の使用状況においても見て取ることができる⁽³¹⁾。なお、表中の数値は、複合語を除いた kāma の使用数と各ニカーヤにおける使用比率を示している。

4 ニカーヤ	単数形の kāma	複数形の kāma
DN	3 (3.1%)	93 (96.9%)
MN	3 (1.0%)	292 (99.0%)
SN	1 (0.6%)	168 (99.4%)
AN	9 (2.6%)	343 (97.4%)

先に引用したいいくつかの古ウパニシャッドの用例には単数・複数両形の *kāma* が見られたが、特に複数形のみが使用されることはない。傍証のため、以下に『バガヴァッド・ギータ』(Bhagavadgītā、以下 Bg)⁽³²⁾における単数・複数の *kāma* (但し複合語は除く)の使用状況を示した。

- (1) アルジュナよ、意にあるすべての欲望① (*kāmān* (pl.)) を捨て… (Bg, 2. 55)
- (2) 執着から欲望② (*kāmaḥ* (sg.)) が生じ、欲望③ (*kāmāt* (sg.)) から怒りが生ずる。
(Bg, 2. 62)
- (3) すべての欲望④ (*kāmān* (pl.)) を捨て、願望なく、「私のもの」という思いなく…
(Bg, 2. 71)
- (4) それは欲望⑤ (*kāma* (sg.)) である。それは怒りである。(Bg, 3. 37)
- (5) 意図から生じた一切の欲望⑥ (*kāmān* (pl.)) を残らず捨て… (Bg, 6. 24)
- (6) 私は生類における、美德に反しない欲望⑦ (*kāmo* (sg.)) である。(Bg, 7. 11)
- (7) 彼らは満たし難い欲望⑧ (*kāmam* (sg.)) にふけり、偽善と慢心と酔いに満ち…
(Bg, 16, 10)
- (8) 彼らは我執、暴力、尊大さ、欲望⑨ (*kāmaṃ* (sg.))、怒りを抛り所とする。(Bg, 16. 18)
- (9) 欲望⑩ (*kāmaḥ* (sg.))、怒り、貪欲。これは自己を破滅させる、三種の地獄の門である。それ故、この三つを捨てるべきである。(Bg, 16. 21)
- (10) 我執、暴力、尊大さ、欲望⑪ (*kāmaṃ* (sg.))、怒り、所有をすて、「私のもの」という思いなく… (Bg, 18. 53)

Bg には *kāma* に関する言及が散見されるが、上に示したように *kāma* の多くは単数形で用いられている。この結果から言えることは、少なくとも *kāma* を「複数形」で用いるという用法は決して普遍的なものではないということである。

換言すれば、原始仏教經典においては *kāma* の集合体⁽³³⁾を意味する複数形の用法が一般的であり、より抽象化された形での単数形の使用はほぼ見られないということである。ここで言う「より抽象化された形」というのは、例えば Bg における (8)「我執、暴力、尊大さ、欲望 (*kāma ṃ* (sg.))、怒り」のように抽象概念が列挙される場合を指しているが、次の偈に見るように原始仏教ではこのような場合においても *kāma* のみ複数形で表されるのが通例である。

Kāmā te paṭhmā senā, dutiyā arati vuccati, / tatiyā khuppiṇā te, cattuthi taṇhā pavuccati, // pāncamī thīnamiddhan te, chaṭṭhā bhīrū pavuccati / sattamī vicikicchā te, makkho thambho te aṭṭhamo, // lābho siloko sakkāro micchāladdho ca yo yaso, / yo c' attānaṃ samukkaṃse pare ca avajānati, (Sn, 436-438)

あなたの第一の軍隊は kāmā (pl.)であり、第二は不快(arati (sg.)) であり、第三は飢渴 (*単複同形) であり、第四は渴愛 (*単複同形)⁽³⁴⁾ であると言われる。/ あなたの第五は沈鬱と睡眠(thīnamiddhan (sg.))、第六は恐怖 (*単複同形)、第七は疑惑 (*単複同形)、第八は偽善(makkho (sg.)) と傲慢(thambho (sg.))、/ 利得(lābho (sg.))、名声(siloko (sg.))、尊敬(sakkāro (sg.))、邪な手段で得た名声(micchāladdho(sg.))、そして自己を称揚し他を輕侮することであると言われる。

では、原始仏教が kāma を複数形で用いたのは何故なのだろう。次節では「複数形」という語形の選択と語義との関連について考察を進めることとする。

3.2. kāma の語義

先述したように、原始仏教においては古代バラモン思想のように kāma を「欲する」という心の働きと見なすことも、これを行為の根本的な動因と考えることもなかった。

一方、「Kāma-sutta」の766偈「kāma を欲しつつある」における kāma は、明らかに欲する「対象」を意味していると考えられる。同様に、767偈の「kāma が失われると矢に射られたように苦しむ」や、769偈の「数多の kāma を人々が貪り求める」等の kāma も、文意から「対象」を指していると解することができるだろう。

このような欲する対象 (いわゆる「欲望の対象」) を表現する場合、実際には kāma 以外にも原始仏教の經典中に次のような記述方法を見ることができる。

以下に示すものはすべて、最古層經典に現れた用例である。

- (1) 具体的な事物名称を列挙する。

「田畑、あるいは宅地、黄金、牛馬、奴僕、女達、親族達… (khettaṃ vatthūṃ hir-aññaṃ vā gavāssaṃ dāsaporisaṃ / thiyo bandhū… (Sn, 769))」⁽³⁵⁾

- (2) さまざまな事物を「名色」⁽³⁶⁾ (或いは「色」) で代表させる。

「バラモンよ、名色 (nāmarūpa) に対する貪りをあまねく離れた人には… (Sabbaso nāmarūpasmiṃ vītagedhassa brahmaṇa… (Sn, 1100))」

- (3) さまざまな事物を感覚器官に対応する五境「色・声・味・香・触」で表す。

「…すなわち色・声・味・香・触に対する貪欲 (rāga) に打ち勝つべし。(…rūpesu saddesu atho rasesu / gandhesu phassesu sahetha rāgaṃ. (Sn, 974))」

- (4) 「快い感受」を付加する。

「へーマカよ、ここに見、聞き、考え、識別する愛すべき事物に対する欲と貪りを除き去ることが、不滅の涅槃への道である。(“Idha diṭṭhasutamutaviññātesu piyarūpesu Hemaka / chandarāgavinodanaṃ nibbānapadam accutaṃ. (Sn, 1086))」

(1) のように具体的な事物名称が挙げられるならば、それが人にとって好ましいものであることが一見して明らであるが、一方「名色」や「五境」のような対象事物を総称する提示方法では、文脈によってはそれが人にとって魅力的であることの付加的な説明が必要になる。したがって、(4) のような用例は最古層經典以外にも散見される。

rūpā ca saddā ca rasā ca gandhā / phassā ca ye sammadayanti satte,
etesu dhammesu vineyya chandaṃ / kālena so pavise pātarāsaṃ. (Sn, 387)

諸々の色・声・味・香・触は人々をすっかり酔わせるものである。これらのものに対する欲を慎んで、定められたときに、朝食を得るために(村に)入れよ。

“Rūpā saddā rasā gandhā phassā dhammā ca kevalā / iṭṭhā kantā manāpā ca, yāvat’
‘atthi’ ti vuccati,” (Sn, 759)

すべての色・声・味・香・触・法で好ましく愛すべく意に適うものが、「ある」と言われる限り、

Rūpā saddā rasā gandhā phoṭṭhabbā ca manoramā / ete ca samatikkamma Anuruddho
‘va jhāyati. (Tha, 895)

快美な色・声・味・香・触、これらを乗り越えてアヌルッダは実に瞑想に耽る。

また、こうした属性に関する形容が、kāmaそれ自体を説明する際に用いられる場合もある。

Kāmā hi citrā madhurā manoramā / virūparūpena mathenti cittaṃ, ādīnavaṃ
kāmaguṇesu disvā / eko care khaggavisāṇakappo. (Sn, 50)⁽³⁷⁾

実にkāmaは色とりどりで甘美であり、心に楽しく、さまざまな形で心をかき乱す。

kāmaguṇā に危難のあることを見て、犀の角のように独り歩むがよい。

このような対象事物とそれが人にもたらす「快い感受」との関係性は、後の「pañca
kāmaguṇā (kāmaの五つのを構成要素)」という教義用語の定義文において一つの定型を獲得する⁽³⁸⁾。

pañca kāmaguṇā. cakkhu-viññeyyā rūpā iṭṭhā kantā manāpā piya-rūpā kāmūpasam
hitā rajaniyā, sotaviññeyyā saddā... ghānaviññeyyā gandhā... jivhā- viññeyyā rasā...
kāyaviññeyyā phoṭṭhabbā iṭṭhā kantā manāpā piya-rūpā kāmūpasamhitā rajaniyā.
(DNiii, 33)⁽³⁹⁾

pañca kāmaguṇā とは、眼によって識別される望ましい、好ましい、意に適った、愛すべき、kāma をともなう、魅惑的な、諸々の色である。耳によって識別される… (略)、

諸々の声である。鼻によって識別される… (略)、諸々の香りである。舌によって識別される… (略)、諸々の味である。身によって識別される望ましい、好ましい、意に適った、愛すべき、kāma をともなう、魅惑的な、諸々の触である。

上記の定義によれば、五根による五境の知覚・認識 (= 触) と「快い感受」によって、外部の事物は愛すべき・好ましい属性を持ったもの、すなわち「対象」としての kāmā へと変換する。これと言わば表裏一体を成しているのが下記の用例であるが、ここには外部に存在する事物本体と人の思惟が生み出す kāmā との相違が端的に述べられている⁽⁴⁰⁾。

Saṅkapparāgo purisassa kāmā⁴¹. / N'te kāmā yāni citrāni loke. / Saṅkapparāgo purisassa kāmā. / Tiṭṭhanti citrāni tath' eva loke. / Ath'ettha dhīrā vinayanti chandan ti. (ANiii, 6.63.3)⁽⁴²⁾

人の kāmā とは、思惟における貪欲である。世間における種々のものは kāmā ではない。人の kāmā とは、思惟における貪欲である。世間における種々のものはまさにかくの如くある。ここに賢者たちは欲 (chandan) を調伏する、と言われる。

では、古代バラモン思想に見られた「心の働き」を意味する kāmā はどうなったのだろう。上記の pañca kāmāguṇā の定義を見ると、「対象」としての kāmā が立ち現れるとき、同時に「心の働き」としての kāmā が喚起されるとある。すなわち、外的事物の変容において「心の働き」としての kāmā はすでに発動しており、先後関係は不明だが、「対象」と「心の働き」は、kāmā において言わば相即不離の関係にあると言ってよいだろう。

なお、このような kāmā についての理解は、上記のような定義文が成立する以前から既にあったと考えられる。なぜなら、最古層経典に見られる kāmā の用例には、上記のような思想を反映した特徴を一貫して見出すことができるからである。

次に示すのは、Av、Pv における kāmā の用例を共起する語によって分類したものである。用例の中で最も多く見られたのは、kāmā に対してこれを強く求める「心の働き」(下線部分) が共起する A) の形である。

- A) 766: kāmāṃ kāmāyāmanassa (<kāmāyati) 769: kāmā yo naro anugijjhati
773: kāmā purime ca jappāṃ (<jappā) 774: kāmāsu giddhā
823: kāmāsu anapekkhino (<apekkhati) 823: kāmāsu gathitā
857: kāmāsu anapekkhinaṃ (<apekkhati) 1039: kāmāsu nābhigijjheyya (<ab-
higijjhati)
1071=1072: sabbesu kāmāsu yo vītarāgo (<rāga)

1098: kāmesu vinaya gedhaṃ (<gedha)

* 複合語 1046: kāmābhijappanti (<abhijappati) 1106: kāmaccchandānaṃ (<chanda)

ここには、「kāma」と「kāma に対する心の働き」という明確な構造が見て取れる。したがって、これらは kāma が外的事物、すなわち「対象」であることを前提とした用例であると見ることができるだろう。

この A)の形は、しばしば「kāma に対する“心の働き”を制御する／離れる」という表現形式を取る。

“Kāmesu vinaya gedhaṃ / Jatukaṇṇi ti Bhagavā / nekkhammaṃ daṭṭhu khemato, / uggahītaṃ nirattaṃ vā mā te vijjittha kiñcanaṃ, (Sn, 1098)

ジャトゥカンニンよ、出離を安穩であると見て kāma に対する貪りを制しなさい、と世尊は言った。得られたものも捨てられたものも、何ものもあなたに存在してはならない。

このような表現形式は後の經典においても散見され、敎説における一つの定型を成している。

Diṭṭhiṃ ca anupagamma / silavā dassanena sampanno / kāmesu vineyya gedhaṃ / na hi jātu gabbhaseyyaṃ punar eti ti (Sn, 152)

見解に近づかず、戒を保ち見を備えた者が kāma への貪りを制するならば、まさに再び母胎に入ることはない。

Rāgaṃ vinayetha mānusesu / debbesu kāmesu cāpi bhikkhu atikkamma bhavaṃ samecca dhammāṃ / sammā so loke paribbajeyya. (Sn, 361)

比丘は、人間と神々における kāma への貪りを制すべし。そしてまた生存に打ち勝って、法を知り、彼は正しく世間を遍歴するだろう。

Yo kho bhikkhave kāmesu chandarāgavinayo chandarāgappahānaṃ, idaṃ kāmānaṃ nissaraṇaṃ. (MN i, 13)⁽⁴³⁾

kāma の出離とは、まさに kāma に対する欲貪 (chandarāga) の調伏、欲貪の捨断である。

Idh' āvuso bhikkhu kāme avigata-rāgo hoti avigata-chando avigata-pemo avigata-pipāso avigata-pariḷāho avigata-taṇho. (DN iii, 33)⁽⁴⁴⁾

友らよ、ここに比丘は kāma に対する貪りを離れず、(kāma に対する) 欲を離れず、(kāma に対する) 愛情を離れず、(kāma に対する) 渴望を離れず、(kāma に対する) 熱悩を離れず、(kāma に対する) 渴愛を離れないのである。

— So aparena samayena kāmānaṃ yeva samudayaṃ⁽⁴⁵⁾ ca atthagamaṇi ca assādaṇi

ca ādinavañ ca nissaraṇaṇ ca yathābūtaṃ viditvā kāmataṇhaṃ pahāya kāmāpariḷ
āhaṃ paṭivinodetvā vigatapipāso ajjhataṃ vūpasantacitto viharāmi. (MN i, 75) ⁽⁴⁶⁾

その私は、後に kāma の生起と消滅と楽味と危難と出離とを如実に知って、kāma への
渴愛を捨て、kāma への熱悩を取り除き、渴望を離れ、内に寂靜の心をそなえて住した。

なお、前述したように「心の働き」としての kāma は「対象」と一体になっており、ここから「心の働き」のみが分離されることはない。実際に Av、Pv において、kāma が「心の働き」としてある対象に向かうという用例を見ることはできず、このことは Sn 全体においても同様である。また、次の SNiii, 2-1-3 のように、特定の対象に向かう複数の心の働きが列挙される際（ここでは chanda、rāga、nandi、taṇhā）、その中に「心の働き」としての kāma が含まれるということはない。

したがって、これは最古層經典から後の散文經典に至るまで一貫して見ることのできる、kāma の用法上の特徴であると言うことができるだろう ⁽⁴⁷⁾。

Rūpe kho Rādha yo chando yo rāgo yā nandi yā taṇhā ya upayupādānā cetaso adhiṭ
ṭhānābhinivesānūsāyā / ayaṃ vuccati bhavanetti tesaṃ nirodhā bhavanettinirodho
(SNiii, 2.1.3) ⁽⁴⁸⁾

ラダよ、色に対して欲 (chando) があり、貪り (rāgo) があり、歓び (nandi) があり、
渴愛 (taṇhā) があり、心の拠所・執着・煩惱となる接近と取著があれば、それが有に導くものと言われる。それらの滅尽が有に導くものの滅尽である。

Av、Pv における kāma の用例において二番目に多く見られたのは、kāma を「避ける、捨てる、厭う、打ち勝つ」の類が共起する B) のパターンである。なお、先の A) とこの B) の用例で、Av、Pv における kāma の大半を占めている。

- B) 768: kāme parivajjeti 771: kāmāni parivajjaye (<parivajjeti)
772: kāmā hi loke na hi suppahāya (<pajahati) 844: kāmehi ritto (<riñcati)
948: kāme accatari (<atitarati) 1070: kāme pahāya (<pajahati)
1097: kāme abhibhuyya (<abhibūyati)

上記の parivajjeti (避ける)、pajahati (捨てる) ⁽⁴⁹⁾ 等は、「対象」としての kāma の存在を予想させるだろう。但し、これががただちに原始仏教における kāma の語義を明示しているとはまでは言えない ⁽⁵⁰⁾。

最後に、ここまでの考察を踏まえた上で、前節の末尾に提起した課題である「複数形」とい

う表示方法と kāma の語義との関係性について考えてみよう。

古代バラモン思想における kāma は「欲する」という心の働きであった。これに対して、原始仏敎における kāma とは、「快い感受」を伴う知覚・認識作用によって生じる外的事物の変容を意味していた。すなわち、kāma とは「欲せられた事物」として立ち現れる具体的かつ多様な外的現象を指しているのであり、原始仏敎が kāma を「複数形」(＝集合体)で表示したのはこのような語義を反映したものと考えてよいだろう。

3.3. 「状況」としての kāma

前節までの原始仏敎における kāma は、個々の人間に直接的に関わるものであったが、たとえば次の Sn, 1041偈における kāma は、外部にある状況として本人とは間接的に関わるに過ぎない。すなわち、偈の中に現れる「清浄行」を行う人物は世間において kāma と呼ばれるものに囲まれているが、それはもはや彼にとっての kāma ではないということである。

“Kāmesu brahmacariyavā / Metteyyā ti Bhagavā / vitataṇho sadā sato / saṃkhāya nibbuto bhikkhu, tassa no santi iñjitā, (Sn, 1041)

メテッテーヤよ、と世尊は言った。kāma において清浄行を保ち、渴愛を離れ、常に正しく思いをこらし、思慮して寂滅に達した比丘には動揺が減している。

本来、個人の内部における主・客の相互作用がなければ、その人にとって kāma は存在しないはずである。しかしながらここでの kāma は、人々に kāma が生じ続ける現実世界そのものを意味しており、このような発想は後の「三界」思想における「俗界 (kāma-dhātu)」に繋がると見ることもできるだろう。但し、最古層經典において見られるのはこの一例のみであり、「kāma-dhātu」という言葉自体は Av、Pv に現れない⁽⁵¹⁾。

付言すれば、こうした状況的な kāma の使い方を、複合語の「kāma-bhava」⁽⁵²⁾の中にも見ることができるのかもしれない。例えば、「ヴェーダに精通したバラモンは、無所有で kāma-bhava に対して執着がなく… (“Yaṃ brahmaṇaṃ vedagaṃ ābhijāṇhā / akiñcanaṃ kāmabhava asattaṃ,... (Sn, 1059)」、或いは「…トーデイヤよ、聖者はまたこのように無所有で kāma-bhava に対して執着がないと知るがよい (...evaṃ pi Todeyya munīṃ vijāna / akiñcanaṃ kāmabhava asattan” ti (Sn, 1091))」等がそれである。ここに見られる「kāma-bhava」は、「kāma における生存」を意味すると解することができる。

ただ一方で、「kāma-bhava」を「kāma と bhava」のように並列的に解釈する見方もあり、いずれの説が真意であるのか、現時点で明言することはできない⁽⁵³⁾。

4 結 び

古代バラモン思想における kāma は、人の内部に発生する「心の働き」(＝欲する)を意味し、これが人間の行為を発動させる根本的な動因と見なされていた。

しかし原始仏教においては、最古層の經典においてすでに kāma は異なる語義で用いられていた。すなわち、原始仏教では人の知覚・認識作用と「快い感受」によって変貌した外的な事物そのものを kāma としたのである。このようにして形成された kāma には、既に「心の働き」としての kāma が含まれており、「対象」と「心の働き」は分離不可能なものである。このような kāma の語義を反映して、原始仏教經典に使用される kāma は、多くの場合「複数形」という形態を有するに至ったと考えることができる。以上が、本稿で考察した原始仏教における kāma の語義及び用法上の特徴である。

付言するならば、原始仏教における kāma の教説は、一方では俗世の事物からの厭離を説く禁欲主義的な色彩を有し、一方では、kāma の発生に関する分析的な思索によって kāma の本質を明らかにするという理知的な側面を有していた。

原始仏教における kāma の思想にこの両面があることを踏まえた上で、今後さらに多面的に kāma の研究を深めていきたい。

〔略号〕

AN	Aṅguttara-Nikāya (PTS版)	Av	Aṭṭhakavagga (PTS版)
CU	Chāndogya-Upāṇiṣad	Tha	Thera-gāthā (PTS版)
Thi	Thelī-gāthā (PTS版)	DN	Dīgha-Nikāya (PTS版)
Nd	Niddesa (PTS版)		
PED	Pāli-English Dictionary (Rhys Davids, T. W. & Stede, W. (Eds.) [2004] , The Pali Text Society, Oxford.		
Pj	Paramatthajotikā (PTS版)	Pv	Pārāyanavagga (PTS版)
BU	Bṛhadāraṇyaka-Upāṇiṣad	Bg	Bhṛgavadgītā
MN	Majjima-Nikāya (PTS版)	RV	Rig-Veda
SN	Saṃyutta-Nikāya (PTS版)	Sn	Suttanipāta (PTS版)

〔参考文献〕

- 荒牧典俊、榎本文雄、藤田宏達、本庄良文 [1986] 『ブッダの詩 I』 原始仏典第7巻、講談社
 上村勝彦訳 [1992] 『バガヴァッド・ギーター』、岩波文庫
 辻直四郎訳 [1970] 『リグ・ヴェーダ讃歌』、岩波書店
 —— [1978] 『古代インドの説話 —ブラーフマナ文献より』、春秋社
 —— [1990] 『ウパニシャッド』、講談社学術文庫

- 土田龍太郎 [1988] 「ヴェーダとウパニシャッド」『インド思想1』岩波講座東洋思想第5巻、岩波書店、pp. 109-147
- 中村元訳 [2014] 『ブッダのことば』ワイド版岩波文庫、岩波書店 (初版は1958年)
- [1992] 『原始仏教の成立』中村元選集第14巻、春秋社
- [1994] 『原始仏教の思想』II、中村元選集第16巻、春秋社
- 並川孝儀 [2008] 『スッタニパータ 仏教最古の世界』、岩波書店
- 服部正明 [1988] 「インド思想史—哲学・宗教思想の源流」、『インド思想1』岩波講座東洋思想、第5巻、岩波書店、pp. 1-105
- [1989] 「インド思想史 (三)」『インド思想3』岩波講座東洋思想、第七巻、岩波書店、pp. 1-25
- 原実 [1989] 「トリヴァルガ」『岩波講座 東洋思想第七巻 インド思想3』、岩波書店、pp. 264-287
- 藤田宏達 [1660] 「三界説について」、『印度学仏教学研究』8 (2)、pp. 467-470
- 前田惠學 [1964] 『原始仏教聖典の成立史研究』、山喜房佛書林
- 宮坂有勝訳 [2002] 『ブッダの教え スッタニパータ』、法蔵館
- 湯田豊 [2000] 『ウパニシャッド—翻訳および解説—』、大東出版社
- 渡瀬信之訳注 [2013] 『マヌ法典』東洋文庫842、平凡社
- Mohan, S(Ed.) [2002] *Śrīmad-Bhagavadgītā*, Sanskrit Academy
- Müller, M. & Fausböll, V. [1881], *The Dhammapada and the Sutta Nipāta* (second edition), Eleimetical Press, British Columbia.
- Norman, K. R.(tr.) [2001], *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta)*, second edition, The Pali Text Society, Oxford (初版は1992年)
- BU: <https://www.wisdomlib.org/hinduism/book/the-brihadaranyaka-upanishad/d/doc122058.html>
- CU: http://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil/1_sanskrit/1_veda/4_upa/chupsb_u.htm
- RV: <http://www.sacred-texts.com/hin/rvsan/rv10129.htm>

〔注〕

- (1) 本稿では、動詞形の *kāmeti*、*kāmayati* 及び *kāmin* (<*kāma*) のような派生形は扱わない。
- (2) 辻 [1990]、p.33。なお、土田 [1988] によれば、ウパニシャッドの時代区分には諸説が見られ、仏教思想との関係性に関しても明確な解答は得られていないという。(土田 [1988]、p. 132) ここでは参考までに、服部 [1988] によるウパニシャッド成立年代の区分を示しておく。初期ウパニシャッド：紀元前700-500年頃、中期ウパニシャッド：紀元前350-200年頃、後期ウパニシャッド：紀元前200-後200年頃 (服部 [1988]、p. 25)
- (3) *Av*、*Pv* の成立が極めて古いことは中村 [2014] (p. 435)、荒牧 [1986] (pp. 410-412)、Norman [2001] (p. 31) らの翻訳書中にも指摘があるが、本稿もまたこれらの見解を踏襲している。なお、経典成立の新古に関する諸説は、並川 [2008] に簡潔にまとめられている。(並川

- [2008]、pp. 13-21)。
- (4) 前田 [1964]、pp. 727-728
- (5) 辻 [1970]、p. 323。なお、英訳は次のようになっている。Thereafter rose Desire in the beginning, Desire, the primal seed and germ of Spirit. (*tr. by Griffith, R. T. H., [1896], at sacred-texts.com)
- (6) 辻 [1978]、p. 100
- (7) 湯田 [2000]、p. 285
- (8) 湯田 [2000]、p. 118
- (9) 行為 (kamma) の持つ重要性は、原始仏教も認めている(「世間は行為によって存在し、人々は行為によって存在する。衆生は行為(業)に束縛されている。進み行く車が楔に結ばれているように。Kammanā vattatī loko, kammanā vattatī pajā, / kammanibandhanā sattā rath-assāṇiva yāyato. (Sn, 3, 654)」。ウパニシャッドとの相違点は、原始仏教が「行為の根本的動因」を意味する概念を置かなかった点にある。
- (10) 湯田 [2000]、p. 117
- (11) 湯田 [2000]、p. 324
- (12) 湯田 [2000]、p. 328
- (13) 原始仏教には、現世において kāma が達成されるというような発想を見ることができない。例えば、Tha では「kāmehi lokamhi na h' atthi titti. (Tha, 778) この世において欲望が満たされることはないからである」、また Therī-gātā (「長老尼偈」、以下 Thi) では「na c' atthi titti kāmānaṃ atittā 'va maranti narā. (Thi, 487) もろもろの欲望は満たされることがなく、人々は満たされことなく死ぬ」と記されている。
- (14) 湯田 [2000]、p. 118
- (15) 湯田 [2000]、pp. 118-119
- (16) 湯田 [2000]、pp. 322-323
- (17) なお、原始仏教経典において修行への「正しい意欲」を示す場合には、もっぱら chanda が用いられている。
- (18) 渡瀬 [2013] によれば、『マヌ法典』の成立は紀元前 2 世紀—後 2 世紀頃とされている。
- (19) 渡瀬 [2013]、p. 42
- (20) 渡瀬 [2013]、p. 42
- (21) 服部 [1989] によれば、『マハーバーラタ』の成立は紀元前 2 世紀—後 4 世紀頃とされている。
- (22) 原実 [1989]、p. 267
- (23) 原実 [1989]、p. 268
- (24) 原実 [1989]、p. 268
- (25) DNii, p. 330
- (26) DNiii, p. 267

- (27) 同一偈が Tha の457偈にある。
- (28) 766偈の kāma について Norman [2001] では、これを単数形とは見なさず〈男性・対格・複数〉を示す Pāli の特殊な用法の一事例とする見方をがあることを指摘している。
 “Lüders accordingly includes this as an example of Pāli -aṃ as a masculine accusative plural ending.” (Norman [2001], p. 163) なお、‘Lüders’とは次の文献である。Lüders, H., (1954) *Beobachtungen über die Sprache des buddhistische Urkanons*, Berlin.
- (29) 語幹 a の男性名詞・複数・対格が -āni の形になるのは、マガダ語の痕跡であると言われている。(中村 [1992]、p. 637)
- (30) 本節では原始仏教における kāma の複数形の用法に焦点を当てて考察を行うのであるが、その際、複合語中の kāma は単数・複数による kāma の語形変化を観察することができないため、原典中に単独の形で現れる kāma のみを調査・分析の対象とする。
- (31) 使用状況の調査には、各ニカーヤの index を使用した。
- (32) 『バガヴァッド・ギーター』(紀元1世紀頃)は、『マハーバーラタ』第6巻に当たる。翻訳は上村訳 [1992] より、原典は Mohan, S (Ed.), 2002を参照した。
- (33) PED では、kāma について collective noun (集合名詞) であると注記している。なお、原始仏教において複数形の使用が多い語には、ほかにも saṅkhāra (行)、āśava (漏) 等がある。
- (34) ここに示した偈における単複同形の名詞には、-ā 語幹の女性名詞、及び -ū 語幹の男性名詞が含まれる。
- (35) Nd の vatthu-kāma (事欲) に関する註釈の中には、「敷物、着衣、奴隸、山羊・羊、鶏・豚、象・牛・馬・騾馬、田・畑、宅地、金貨、黄金、村・町・王都、王国、地方、宝庫、穀倉 (attharanā pāpurāṇā; dāsīdāsā ajelakā kukkutasūkarā hatthigavāssavalavā khettaṃ vatthu hiraṇṇam suvaṇṇaṃ gāmanigama- rājadhāniyo raṭṭam ca janapado ca koso ca koṭṭhāgāraṇ ca,)」が挙げられている。(Ndi, p. 1)
- (36) 「nāma-rūpa」(名色) という語の解釈には諸説あるが、中村 [1994] によると (1) 現象界の一切の事物の総称、(2) 人間存在の主観面 (心理作用) と客観面 (物質的側面)、(3) 「五蘊」の三種を意味し、(2) と (3) は仏教的な用法であるという。また、ウパニシャッドにおいては nāma (名称) と rūpa (形態) によって個別性 (individuality) が成立し、nāma (名称) と rūpa (形態) を捨てることですべては一に帰すとされる。(中村 [1994]、pp. 497-503)
- (37) 類似の内容は、Tha, 787偈、Tha, 1112偈にも見られる。
- (38) この定義文は、原始仏教経典において各所に用いられている。特に MN では頻繁に用いられており、MN i, 13経, 14経, 26経, 38経, MN ii, 59経, 66経, 75経, 80経, 99経, MN iii, 122経, 139経に現れる。
- (39) DN iii, 33. 2.1, p. 234
- (40) ここに見られるような「物」と「心」との分離は、おそらく原始仏教の後期に展開された思想であると考えられるが、これに関する論議は別稿に譲る。

- (41) なお、この偈は単数形による kāma の数少ない用例の一つである。
- (42) ANiii, p. 411。なお、これとほぼ同じ内容の偈が SN.i, 1.4.4 (SN i, p. 22) にある。
- (43) MN i, p. 87
- (44) DNiii, p. 238
- (45) *atthaṅgamaṃ : PTS 脚注
- (46) MN i, p. 506。なお、kāma と心の働きとの関係性を反映した複合語には、外にも kāma-rāga、kāma-chanda、kāma-sneha、kāma-pipāsa、kāma-esana 等がある。
- (47) このような kāma の特徴を反映するために、荒牧 [1986] は原典中の kāma をすべて「欲望の対象」と訳出し、また Fausböll [1881]、Norman [2001] の英訳では kāma に対して常に「sensual pleasures」という訳語を当てているのではないだろうか。もっとも、各翻訳書中にこれに関する言及は見られない。
- (48) SNiii, p. 191
- (49) 「kāma を捨てる (pajahati 或いは jahāti)」という表現は、「出離」に関連して用いられることが多い。
- (50) なお、Sn には「心は kāma を望まない (kāmesu nāpekkhate cittaṃ (Sn. 435))」、或いは散文部分に「kāma を享受しよう (kāme paribhuñjeyyan (Sn, p. 90, L15))」等、明らかに「対象」としての kāma を意味すると思われる用例を見ることができる。
- (51) 「欲界」(kāma-dhātu) の語は Sn の他章にも見ることはできないが、韻文経典である Tha の 378偈 (「kāma-dhātu に導かれていた (kāmadhātupurakkhato)」、181偈 (「kāmadhātu を去った (kāmadhātuṃ upaccagaṃ)」) に現れる。
なお、Sn には 754偈、755偈に「色・無色」への言及があり、藤田 [1960] はこれらの偈の背景に色界・無色界の観念があることを指摘している。
- (52) Sn, 176偈にもほぼ同一の偈がある (「深い智慧があり、微妙な道理を見、無所有で kāmabhava に執着がない… (“Gambhīrapaññaṃ nipuṇatthadassīṃ / akiñcanaṃ kāmabhavē asattaṃ...” (Sn, 176))」)。
- (53) Pj の註釈では、Sn, 1059が「kāmesu ca bhavesu ca」(Pjii, p. 592)、Sn, 1091が「kāme ca bhavē ca」(Pjii, p. 597)となっている。荒牧 [前掲] もこれに沿った和訳 (「さまざまな欲望の対象にも、くり返し再生してこのまま生きていく存在にも愛着することがない」) を行っているが、中村訳 [1991]、宮坂訳 [2002] ではいずれも「欲望の生存」となっている。
なお、Sn, 639偈、640偈ではそれぞれ kāmabhava、taṇhābhava が同じ内容の偈に用いられており、同じ対を Dhammapada の415、416偈に見ることができる。

(あんどう よしこ 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員：並川 孝儀 教授)

2017年9月26日受理